



光はたった一言

富山市立城山中学校 2年 山田 優菜

ヒソヒソ、ヒソヒソ。私を見ながら何かを話している。私は小学生の頃、一人だった。小学校低学年の頃、私は二人の友達と一緒にいた。仲は良い方だったと思う。しかし、ある授業を境に私の世界から光が消えることになる。音楽の授業だった。二人でペアを組んで発表しないとイケなかった。私はいつも一緒にいた子の片方と組んだ。もう一人の子は、ペアを探していた。私は、気づかなかった。私のクラスは奇数人で一人余ってしまうことに。そして、その子が余ってしまったことに。私は一人にならなかったと安心していた。余った子は私達の方に来て、私と組んでいた子と組んだ。私はあっという間に一人になった。反論したかった。でも、その子は気が強くて言論勝負だと勝ち目がないのが分かり切っていたのでできなかった。単純に勇気がなかったのもあったと思う。それからの練習の時間が辛かった。一人だったから。皆、練習に集中してるだろうが、一人の私を笑っているように見えて怖くなった。授業がようやく終わり、いつものように二人のところに行こうとしたら、私に気づいた気の強い子がもう一人の子と走っていた。そんなことが何回もあった。理解した。一人になるのが怖いから二人でいるんだ、と。私は諦めて他の同級生に話しかけることにした。しかし、私が他の子と話していると、気の強い子が私に話しかけ二人になったところで私に「なんであの子といるの」と質問した。私は足がすくんだ。ようやく「だって仲間外れにされたから」と返した。そして返ってきたのは沢山の言葉だった。そっちが来ないだけ、とか。被害者ぶんな、とか。私は反論する隙も与えられないまま浴びせられる言葉を受け止めた。言いたいことは言い終えたらしく、最後に「他の人には言わないでね」と告げて教室に帰っていった。小さくなる背中を見つめ、呆然と立つことしかできなかった。その日の夜、私は一人で泣いた。涙が止まらなかった。うすうす気づいてはいたのだ。私達の間に絆なんて存在しないのだろうと。

それからは同級生に話しかけることもできず、二人に話しかけることもできず、何も状況が変わらぬまま学校に通っていたら、いつの間にか三年が経っていた。私を見る蔑むような二つの目、指される指。交わされる言葉は、距離が遠すぎて聞こえないのが安心するようで少し哀しいような気がした。ある日の昼休みのこと。誰もいない教室。外から聞こえる喧騒から切り離されたかのような静かな空間に立っていた。することがなかった。一人だった。しばらくすると、一人の子が入ってきた。私に気づくと、「皆と一緒に遊ばないの」と尋ねられた。私は何も言えなかった。涙が出そうになった。その子は私の様子から察したらしく、ずっとそばにいてくれた。私は静かに泣いた。それから、その子と仲良くなった。何か言われなにか心配だったが、思いのほか何も言ってこなか

った。私の世界に光が戻ってきたみたいだった。

声をかけてくれた子とは、中学二年生の今でも仲が良い。私とその子と一緒にいるのは一人になりたくないという理由もあるだろうが、一番はそれじゃないと思う。きっとその関係が私にとって友達と呼べるのだと思う。

私が三年間悩み続けたものは、他の人の一言で解決することができた。あの三年間で、私はずっと一人でいたことにあの子以外、誰も気づかなかった。一連のことを通し、思ったことがある。人は、意外と周りを見ていないことだ。私は、一人でいるのは辛かった。けど、それよりも誰も気づいてくれなかったのが、何より苦しかったのだ。三年間あって担任の先生も変わり、同級生も、誰も私を救ってくれなかった。それは、皆が自分のことで手一杯で、周りを見る余裕がなかったからだと思う。実際、私も自分のことばかりで、全くクラスの交友関係を知らなかった。私に声をかけてくれた子だって、悩みとか沢山あったはずなのに、私に気づいてくれた。私はそんな人になりたいと思った。辛いことが多い世の中で生きていくうえで、皆が誰かに相談できるとは限らないし、相談しても問題が解決しないことだって沢山あると思う。そんな時、寄り添ってあげられる人になりたい。私が辛かった時、そばにいてくれたあの子のように。

小学生の三年間でついた沢山の傷は、生涯ずっと背負い続ける傷だと思う。あの三年間のおかげで、私は人を傷つけないように自分の行動を見直し、一度考えてから言動するようになった。そして、周りをよく見て一人でいる人がいたら声をかけるようにした。私は誰か一人が苦しみ続けることのないよう手を差し伸べられる人でありたい。